

「鳥雲に^{ひとり}ゑさし濁の行衛哉」

水野丈夫（動物学教室・臨海実験所）

いつの間にか本郷での41年が経ってしまった。高校生だった私は、終戦後間もなく開かれた東大の公開講座に出席した。その折りにたまたまシェパーマンの実験発生学なるものを聴講したが、理学部とのそもそもの縁である。生まれて初めて聴くオルガナイザー（形成体）作用の話は私の心を打ち震わし、夕暮の本郷通りを友人と二人で歩いて帰る道すがら、エマオへ向かう弟子たちのように、胸が熱くなったことを思い出す。しかし、その折りの新進気鋭ながら瘦せたソクラテスの如き講師が藤井隆先生であり、やがて先生に一生師事することになることは、知る由もなかった。理学部に入り、3年生になって卒業研究のテーマとして形態形成の研究をしたいと合田得輔先生に申し出たところ、「形態も大切だが、機能も重要で、両者は紙の両面の如きものであるので、どちらも研究する必要がある」といわれた。これら二つのことは、自分の研究の発端ともなり、また、その後の動物学第2講座の研究の発展に大きなインパクトを与えるものとなった。

いわゆる東大紛争では、比較的冷静だった理学部でも培養室のガラス窓を破って投石がとび込んでくるようなことがあったが、紛争が終焉に向かうや、このようなときこそ大切な学問をするようにとフランス留学を命じられた。フランスへ行ってみると、いわゆる五月革命はあとかたもなく静まっており、所長のヴォルフ教授が毎木曜日の夕方になると必ず研究室に現われて、判で押したように「何か新しく、よい発見をしたか」と尋ねられるのであった。ヴァンセンヌの静寂な森の中にあるその研究所では、当時（そして現在もであるが）人真似でない、しかも、質が高い、という2条件が揃う発見が毎日のようにされていた。

帰国後は新しい研究網が第2講座にしかれた。摩訶止観に「一目之羅不能得鳥、得鳥之羅唯是一目」（羅は鳥を捕らえる網）とあり、この文のこのころを詠んだという「鳥雲にゑさし濁の行衛哉」との句は折にふれ私を励ました。

そして歳月は巡って停年を迎えようとしている。これまでで行ってきた器官形成における組織間相互作用の研究によって、自然の神秘を垣間みることができたのは計り知れないほどの恩寵であったと思っている。その間に細胞分化を伴わない形態形成が見出され、片面しかない紙がみつかった。もとよりこれは海浜の真砂の一粒に過ぎないわけで、なすべきことは山積している。これからも理学部の優れた若い研究者諸兄が強力な自由な研究を押し進められるよう期待してやまない。

一方、臨海実験所は創立100年以上を経たいま、建物の新築や諸磯湾口の防波堤計画などの諸問題を抱えているが、我が国における海洋生物学研究の最先端の場として発展させたいし、また、理学部が誇りとする附属施設であらしめたい。

なにはともあれ、理学部では多くの優れた先生、友人、学生に恵まれたうえ、好きな研究ができて幸せであった。事務局の方々にも大変お世話になった。東大理学部が常に「新しく、よい」発見の垣塙であることを祈りながら、お別れします。

皆様、ほんとうにありがとうございました。